臨終記

久米正雄

臨終記

すこやかな先生の顔のみおさめであった最後の木曜日は、わすれもしない、十一月の十六日であった。

その夜われわれは、ほとんどその場かぎりの雑談しかうかがわないで、いつも十二時ちかくまで居残るのを、十二時すこしすぎに辞去してしまった。あとからきくと、その時のこった森田さんや安倍さんたちには、またまた「則天去私」の文学観について、いっそうくわしいお話があったのだそうである。私はいまでもなおあの時早く

帰ったのを悩んでいる。田端までの芥川の帰りが遅くなるのと、私が「黒潮」へやる原稿の締切を前にしていたのとのため、用のない赤木君までさそいこんで、松岡をくわえた本郷行の四人は、例になく早い時刻を柳町の停留場にたたずんだのであったが、あの時先生がいつものとおり、かるく親しげな会釈とともに、「失敬」とおっしゃったのを、永久に先生とのお別れの言葉であると知ったなら、ああまで手軽く辞去するのではなかったのに、それもこれもいまはただいたずらに遺憾の種として思いださるるのみである。

あとからきくところによれば、先生はあの夜すでにすこしく不快の徴をきざしておられたのだそうである。

そのつぎの木曜日はちょうど十一月の二十三日で、私の二十五歳が満ちる誕生日にあたっていた。私はこの記念すべき日の一夜を、先生のそばですごそうと思い、その祝いのために心ばかりの洋酒をたずさえて、七時ごろ先生のお宅を訪れた。ところがいつも夜は閉めてあるはずの表門が広くあけはなたれて、くらい玄関には俥が二台待っていた。私は何事がおこったのかと思った。しかしその日の喜悦にみちた軽噪（けいそう）な気分で、私はそれをなん

でもない富有な訪問客があるのだというくらいにしか考えずに、枯れてさらさら鳴る柱の葛をまさぐりながらかなり勢いよく玄関のベルをおした。するといつもみなれた女中さんがでてきて、「あの今日は御病気でございまして、どなたにもおめにかかれません」といった。

私はおどろいてしばらく女中の顔をみまもった。そして急にうきうきしていた（私はすこしく酒気をさえおびていた）いままでの自分を、たえがたく恥ずかしいように感じた。それで御容態をくわしくききただす言葉もなく、なにものにか叱られたような心持で、惚惶と先生の

門から腫(きびす)をかえしたのであった。

それは先生が、御持病にはもっともおそろしい兆候である、嘔吐をもよおされた翌日であった。玄関に待っていたのは主治医の真鍋さんたちの俥であった。

そのまたつぎの木曜日には、私は一二の雑誌から依頼された、新年号の原稿に忙殺されていた。しかし夜数時間を先生のもとですごすことは、労作の慰癒にもなりまた刺激にもなるのが常であったから、先生の御病状さえよければでかけたいと思った。そしてひとまず赤木君のところへ電話をかけて、先生の様子を問いあわせ、よけ

ればいっしょに誘ってゆこうと思った。ところが赤木君はすこしも先生の容態を知らなかった。それでやむをえずさらに先生のお宅へ電話をかけた。すると若い男の人の声で、二三日前はたいへんわるかったけれど、いまはすこしくおちついたから安心せよという旨の返事があった。私はそれで訪問を思いきるとともに、「どうぞ御大切になさるように」といってすぐ電話をきった。

すでにこのときの先生は、第一回の大出血をみたあとだったのである。二三日前にわるかったというのは、二十八日の夜十一時半ごろに、先生はふいに床上におきあ

がって、卒倒されたのであった。

こえてそのつぎの木曜日は、十二月の七日であった。それは今度こそ先生にあわれるだろうと期待して、しかも空白（ブランク）のままですぎた、第三回目の木曜だった。そしてわれわれにとっては主人のある、漱石山房ときりはなして考えることのできぬ、木曜日という木曜日の、その最後のものであった。私はすでに前々日新年物の約束をはたして、かなり暢然たる気分のうちに、鎌倉にいる芥川を訪れた。松岡もその前日から行っていた。わずか五日ばかりの短日月でも、この三人をしばらくはなしていた

日子は、あう早々からの談話にいつも以上の勢いをあたえた。三人は枕をそろえてねながらまた砂浜を歩きながら、いろいろ創作について語りあった。もちろん先生の病気の話もでた。けれども誰一人として、先生の死を考えたものはなかった。われわれはひたすらに快癒するものと信じきって、すべてのことがらをそのうえに築きあげていた。私は前月中にある職をえて、すぐやめた事実を記録的に書き綴ったものを、ぜひ先生に読んでいただくつもりでいた。先生はすべてわれわれのものを読んでいてくだすったが、ことにこの記録は、私が先生に事実

を報告した時、先生から「そいつを書くとロシアものになるね」と嘲笑と同情とで微笑されたなまなましい記憶をもっていたからであった。とにかくこういうようなあかるい心持で、われわれはその木曜の午後六時ごろに東京駅へ帰りついた。蒼茫と暮れてしまった街路には、もう寒い風がたちはじめていた。三人はそのまま話したりないような心持で、街を歩いた。そして神田のパウリスタへよって、またまた「駄弁欲の充足」を試みようとした。皆の心にはいつもならもう先生をとりかこんで、うち興じているいつもの木曜日がうかんだ。そしてそれの

ない今日のさびしさを、ぼんやり心にしみて感じていた。帰り道に家が近くなると、松岡は急に「なにか僕の留守中にわるいことができているような気がする」といいだした。私もなんだか胸騒ぎがしていた。しかしそれを先生の死と結びあわせることは、夢にも考えなかった。われわれはただそれをあることの緊張状態を閲した疲れから生じたものと論断した。

そのあることというのは、こうである。じつはわれわれは、いなわれわれのなかでこんないたずらをもっとも好んでいる松岡は、八幡宮の鳩を一羽、ひそかにとらえ

てふところにいれたまま東京まで帰ったのであった。彼はあたかも白昼の盗人のように、鈴木さんの小説にでもありそうなかわいい小鳩を、鳴かぬようにうごかぬように左の胸のところでおさえて、二三時間の途中を、われわれ以外のだれにも気づかれずにもち帰ったのである。私はそれやこれやであまり妙ないたずらがすぎたため、また人に気づかれぬようにする冥々の努力のために、なんとなく気疲れが生じたのだと思った。そして私はそれを鳩のたたりだといった。しかしそれがはたしてたたりとすれば、じつに大きすぎるほど大きいたたりであった

ことが、二三日ならずして知れたのである。

三人がもっとも近い松岡の家までたどりついて、そこの室内に放った時、すこし弱ったらしい鳩は、かわいい赤い目をきょとつかせて、不審そうに四辺をみまわした。もう三人はだまっていた。そのとき急に私は、なんともしれぬ寂しいような気がして、またいつもの楽しい木曜日を思いだした。そして急に先生へ手紙を書きたくなった（それもいまから考えるとめぐりあわせだという気がする。）それでその机へすわって、かたわらにあった松岡の手柬紙をのべて、とりとめもなくのんきなことを（先

生があくまで快方にむかってると信じていたので）、ながながと書きつらねた。それには自分たちの近況やら、また層々累々とアクセレレートしつつある「明暗」の叙述に驚嘆の言葉を呈したりした。私はあきらかにそれが病床で、もしくはすでに常態にちかく回復している先生によって、読まれることを予想していた。そしてさらにそれが先生のある微笑をかもしだすだろう、したがってある種のお見舞にもなるだろうとまで、考えていたのである。かたわらにいた芥川はそれをみて、「いま手紙をあげたところで、きっと読めないからむだだよ」といっ

た。けれども私は私の心持としてそれを投函せずにはいられなかった。

その翌日（八日）の夕方、私は右の手紙に対する返事を夏目さんからいただいた。しかしそれは先生からいただいたのではなかった。裏には夏目鏡子代としてあった。先生のに似てはいるが、うたがいもなく小宮さんの手跡であるのがわかった。私には鏡子の「鏡」をくずしたのがどうしても読めなかった。けれども私は不安と危惧とにかられながら、あわてて封をきった。その手紙にはこうあった。

御手紙拝見致しました。先生は二十三日にすこし吐血、それからずっと寝つゞけで、二十八日と今月二日と、その後二度内出血がありました。二度ともかなり険悪な状態だったのですが、ことに二日の晩は、あとでお医者の話によると、夜明けまでもつかしらと思って心配したくらいだったそうです。二日以後やゝ平穏だったのですが、昨日からまただいぶ工合がわるくなりました。これは二週間以上絶食のため衰弱が来たので、この衰弱は営養の供給を十分にしなければ危険であり、しかも営養分にするためには、内出血があるか

もしれないということを予想しなければならず、お医者はだいぶ心配しておいでです。ゆうべは真鍋さんはじめお医者が外に二人ほとんど徹夜的についていてくださいました。

事件が突発しない限り、営養の補充がつくかぎり、大丈夫だと思われますが、それでもまだどうなることか分りません。

十二月八日　　夏目鏡子代

久米正雄様

その日も遊びほうけて帰ってきた私は、美しい書体で

流暢に書かれた、しかも険悪きわまる内容を読んで、ほとんどびっくりしてしまった。けれどもまだ死ぬとは考えていなかった。そして何事をおいても、お宅へかけつけてしかるべきを、まずおりをみてからにしようと思った。それにまだお宅とはすこしも親密になっていない自分が、とりこみの最中あがっても御迷惑だと考えて、ひそかに先生の快復を祈るだけにとどめた。あとからきくところによると、前の私の手紙は先生が生死の境をたどっていられる、たいせつな危機にとどいたのだそうである。そしてそれをあけてみた小宮さんは、奥さんに「こ

いつあまりのんきなことをいっているから、ひとつおどかしやりましょうよ」といって、いままでなるべく秘密にしてきた症状を、かなり威嚇的に知らしてくれたのだそうである。それをみて私がおどろいたのもむりはなかった。

さて、その日も暮れて、あくる九日となった。私は私の生涯において、わすることのできぬこの日を、いま涙とともにかたらなければならない。

九日の午前中の私の部屋には、昨日の手紙からもちつづけた心配だけで、まだ何事もなかった。私は遊びにき

た松岡と、もう一人の中戸川君とを対手に、よもやま話をしていた。松岡はもちろんであるが、中戸川君も先生の崇拝者であった。そしてちょうど朝日の懸賞小説の話がでたとき、同君は「夏目先生にみていただけるなら、落選してもいい」というような話をして、私から最近の症状をきくと、かなりびっくりして心配していた。けれどもわれわれはまだ死には、一語もいいおよびもせず、考えもしなかった。それでもまたたくまに話題はそれからそれへ移って、とこうするうち、昼ちかくなった。

するとそのときである。私は夏目さんからという電話

のとりつぎによって、女中からおどろかされた。いそいで出てみると、それは同邸にいっていた赤木君からかけてくれたものであった。私があわてて耳にあてた受話器のなかで、赤木君の昂奮したかん高い声が、とぎれながらにこうひびいた。

「先生はいま危篤なんです。もう一二時間もたれるかどうかわかりません。いまからすぐきたら死目にあわれるかもしれません。君から芥川君のほうへすぐ知らしてくれたまえ」

私はこれだけの要点をききとると、ふるえる手で受話

器をかけおわって、いそいで室へとってかえした。なんだか馳けたわけでもなんでもないのに、ひとりで息ぎれがした。私は唾をのむようにして気をおちつかせながら、松岡と中戸川君に電話の内容を報告して、なによりもさきに、先生の宅へかけつけることにした。松岡はまだのこっていて、さしあたった雑誌の用務をかたづけねばならなかったのである。

私は下宿をでると、いそいで森川町の郵便局へいって、鎌倉の芥川へ電報をうった。私は今日彼を主賓にした歓迎会が鎌倉の小町園であるのを知っていた。そこで彼の

居宅とその料亭とにむかって同文電報を二つうった。そしてかなりあわてふためいた心持のなかでも、そういう宴席なかばに飛電を手にした彼の態度を、まざまざと想像して、その後のなりゆきを気づかってやる余裕もあった。ただしかし電報料として五円紙幣を出した時に、つり銭がないからと局員にいわれた時は、わけもなくいそがれて腹がたった。それで場合が場合だからと言葉せわしく説明して、やっと料金を借りることにした。そしてそこへきた電車にいそいでとびのった。

電車のなかの私は、あきらかにわくわくしていた。け

れども、危篤ときいていながら、なお先生の生を信じていた。

松住町の停留場でいったん下車すると、そこに斎藤阿具先生がくろッぽい外套をきてたっていた。私はすぐに斎藤さんも先生のお宅へ行くところだなと思った。私は帽子をとって挨拶した。

「夏目先生のところへいらっしゃるのですか」

「ええ、だいぶわるいときいたから、ちょっと見舞にゆこうと思って」

私は斎藤氏がまだ今日の急変を知らないのを知った。

「もう御危篤だそうです。これからいっても先生の死にめにあわれればいいと思ってるんです」
「そんなにわるいのですか」斎藤氏もおどろいた。
私は斎藤氏とそこへきた電車にのった。私は吊皮につかまって、みだれる心をおさえながら、斎藤氏と先生のことについて話した。
「いっしょに大学にいるじぶんは、夏目君もああいう創作家になるとは夢にも思わなかったがねえ」
話はそんなことから、先生の小説や、最近の「明暗」のことなぞにまでおよんだ。

「このごろはなんだか心理学の講義をきいているようなので、私には面白味がわかりません」

こんなこともいった。私は苦笑しながらきいていた。私にはなんだか、そういうような話題に固執することのできない、みだれた心持がおこっていた。私はなんだか斎藤氏の平静を、うらやましいような腹だたしいような気持でながめていた。

柳町の停留場でおりると、私の焦慮は南町まで自分の足であるく気をおこさせなかった。それでなおも、「夏目君がああいう小説を書けるのも、学問の根底ができて

いるからですよ」と話しかける斎藤氏をふりきったように、

「なんだか気がせきますから、失礼ですが車にのります」といってそこの車夫をよんだ。

「そうですか。どうせ僕なぞはいまいってもあえまいから、あるいてゆこう」こういって斎藤先生はさきへあるきだした。

私は俥をいそがせた。そして門前でのりすてると、あたふたして勝手のほうの橡側へまわった。

私が一度もとおったことのない、そこの茶の間には、

多くの人たちが黙然としてあつまっていた。それを見ると私は、まだ大丈夫なのだなと思った。そして「久米君か。まあこちらへきたまえ」と赤木君に請ぜられるままに、狩野さんや大塚さんや菅さんなぞの背後をまわって、森田さんや津田さんなどのいる、座敷の隅の、箪笥のあいだの席にすわりこんだ。

「ごようすはどうなんです」私はなによりもさきに小声でたずねた。するとそばにいた赤木君が声をひくめてこう語りだした。

「さっきはもうだめだというんで、みなが告別に病室へ

入ったんだがね。最後にほとんど絶望的にやったカンフル注射がきいてねえ。今朝からもう何度やっても反応がなかったのを、それをやると急に頭をうごかしだしたんだ。それでやっとまた一縷の望みをえたんだが、僕はなんだか奇跡がおこって先生がなおりそうな気がする。げんに修善寺のようなこともあったんだから、このさい奇跡のおこるというのも不自然でないような気がするよ。これはなにも僕が先生に対する愛情からそう思うんでなくて、これまでに科学的に手当をつくしていよいよだめだという最後まできたとき、ほとんどあきらめのために

やったデスペレートなカンフルの一本が、急に反応をあらわしたというのは、人力をつくしきったあとに、自然の力が働きかけたともみられるからねえ。もう医術のうえで、ナツウルのハイルングをまつしかないときに、それがあらわれそうになったんだから、どうしても僕には先生が助かると思うよ。さっきから僕の直覚がそう感じている。きっとなおるよ」

こういうようなことをいって、僕の顔をみながら赤木君は念をおすように眉をあげた。するとそばにいた森田さんも、

「僕もなんだかさっきから、そういうような気がしていた」といいだした。

私もそれを信じて疑わなかった。赤木君はなおもいいつづけた。

「なにしろ先生の身体ほどねばりづよいものはないんだからねえ。普通人なら死期の脈搏はたいてい百二十だというんだけれど、先生のはもう百三十まであがってもちつづけてるんだもの。いったい死ぬときには脈搏がどんどんあがっていって、それに反して体温がぐんぐんさがってゆくんで、その表がちょうど十字形に交差するため、

それを死の十字（トーテンクロイツ）というんだそうだが、先生のはとうにそいつを越えてるんだからねえ。そいつをみるとじつにすごいような気がするよ。それに先生はあくまで意識が鮮明ときてるだろう。先生の頭（コツフ）と心臓（ヘルツ）とはどこまで丈夫にできてるんだかわからないよ。そういうねばりづよい身体なんだからここでわるい絶頂まできて、なおもちつづけてるのをみると、このうえわるくなりッこはない、きっとくだり坂で順調になってゆくよ」

あくまで信じきった赤木君の言葉をきくと、希望をもちたいもちたいとねがっていた皆は、なぐさめられたよ

うに元気をうかばせてきた。ことに修善寺で死の峠をこした経験をもっしていることが、このせとぎわまできて人々をまったく絶望せしめることがなかった。そしてその希望は、けっして一時のつけ元気でなく、あくまで信念から出たらしく皆には感ぜられていた。

そのときむこうの机のところにいた松根さんが、そこにいた人々に一斑を知らせるため、先生の病状の経過を略記した紙片をひろげた。私はそれによって先生の病状をはじめて知ることができた。

それにしるされたことや、あとから奥さんにうかがっ

て知りえた、その日までの先生の病状は、ざッとこういうことであった。――

先生は最後の木曜日――十一月十六日の日から気分がすぐれなかった。そしてその一両日後に、大谷繞石さんからもらったつぐみのかす漬をうまそうに食うと、すこしく胃に疼痛を感じた。けれども床につくというほどのことはなく、二十一日までそのままで「明暗」の執筆もつづけておられた。

二十一日は今年私どもといっしょに仏文科を出た辰野君の結婚披露会が精養軒にあった。辰野君は面識こそな

いが、先生の崇拝者であった。そしてその新婦の君は、先生にしたしく私淑しておられる山田三良氏夫人の御令妹にあたっていた。それで同夫人の懇請によって、先生はその席へ出ることを承知しておられたのである。

先生はその日例によって午前中に「明暗」の第百八十八回を書きおわられた。そしていくらか胃の疼痛をおぼえたので、そのままじっと書斎のガスストーブの前に横臥しておられた。そのうちに夕方の四時ちかくにもなったので、奥さんは衣服を着かえて仕度をしていると、女中が「旦那様はなんだか御塩梅がわるいとおっしゃって

おいでです」というので、それでは今日はよすのかと思って、そのまま仕度をしてしまった、奥さんは書斎にはいった。先生はそのとき机にもたれて、顔をふせておられた。

「あなたどうなさいます。おいでになりますか」奥さんは、そばによってたずねた。

「うん。もう行くのか」こういって先生は静かに顔をあげた。奥さんは万一を心配して、

「御塩梅がわるいのなら、今日はおやめになったらいかがです」となおもいった。すると先生は、

「いや、せっかくだから行こう」とこういってたちあがった。

精養軒で先生は食卓にあった、前食の南京豆をたべた。奥さんが心配して「そんなものをあがって、大丈夫ですか」というと、「なに大丈夫だよ」といったまま、ぽつりぽつりと、その香ばしい南京豆を、先生は平気でたべつくした。

それからこれは病気には関係ないが、先生はその席で好きな小さんの落語をきいた。語ったのは「うどんや」だった。そのとき先生の側に座を占めていた安倍さんの

話によると、先生は小さんが出てくると、すぐ微笑をたたえてききおわったそうである。

帰ってからのその夜は、奥さんの心配するほどもなく、無事にすぎた。そして奥さんが、「なんともありませんか」とたずねると、「なんともないよ」といって、やすらかに床につかれたのであった。

あくる二十二日の朝、いつも早くめざめられる先生は、どういうものかなかなかおきてこなかった。それで奥さんが「どうかなすったんですか」というと、「なんだか頭のぐあいがわるい」とおっしゃって、しぶしぶおきあ

がられた。そしていつものとおり、「明暗」を書くために机にすわったが、先生の目は、原稿紙の上方に、小さくこころおぼえにしるした189という回数の数字をみつめたまま、ながくうごかなかった。そしてそのまま机の上へうつぶしたきり、昼ごろまでいたが、とうとう原稿紙の上には一字も書かれずにしまった。たえず胃部におこってくる疼痛と、それにしたがって悩みがちな頭部をおさえて、先生は完結されない草稿を前に、しずかに、しかしながら必死に苦悶とたたかってこの午前をすごしたのである。昼をすぎると先生は奥さんをよんで、「今

日はくるしくて書けないから寝る」といわれた。そしてなおも語をつづけて、「人間もなんだな、死ぬなんてことはなんでもないもんだな。おれはいまああしてくるしがっていながら、しずかに辞世を考えたよ」といわれた。

奥さんはきみのわるいことをいいだしたなと思った。それでその辞世がどういうことであるかをきく勇気もなく、しいてその問題を回避した。そしてそのとき考えた辞世というのは、永久に先生の口からもれずにしまった。奥さんもこうなると知ったなら、ああしてさけるのではなかったと、いまつくづく悔いていられる。私はそのと

きの奥さんの心持も同感はできるが、はたしてどんなことを先生がいうつもりだったか、それを逸したのはくれぐれもおしいような気がする。

こうして先生は、この時はじめて床を敷いてねむりにつかれた。これがそもそもの先生が死床（デッスベッド）であったのである。

先生の御病気はひとねいりすると、すこしく回復するのが常であった。その日も先生は宵にねむりからさめると、元気がよくなり、空腹をおぼえて、奥様に「なにか食わせろ」と請求した。こういう場合に、なにか固形物

をうっかりたべさせると、あとがきっとわるくなるにきまっていた。けれども先生の請求やみがたく、奥さんは牛乳と、申訳だけに一分ほどの厚さにきった一片のパンを先生の前においた。するとそれをみて先生は、「ずるい奴だな。これッぱかりしかもってこない」と叱った。それで奥さんはさらに一分厚さのパンをもう一片そえて、「そんなにめしあがってわるくなったってしりませんよ」とたしなめた。先生はすこし満足したように笑いながら「大丈夫だよ。わるくなればおれの身体で、おれがくるしがるんだからいいじゃないか。まさかこれで死

にゃしないよ」といって、その二片のパンをうまそうにたべおわった。するとそれから小一時間もたたぬうちである。先生は急に気分がわるくなって、嘔吐をもよおされた。そしてさっきのパンをすっかり吐いてしまったのであった。二十二日の夜の十二時ごろのことである。

胃のわるい先生にとって、そういうことはこれまでしばしばあることだったので、奥さんもそうたいしておどろかなかった。そしてあくる朝をもってはじめてお医者をむかえることにした。医師というのは、かつて先生がかかりつけの菅さんが死んで以来、また去冬の糖尿病を

診察してもらって以来、先生の主治医たるべき内約のあった真鍋嘉一郎氏であった。

おりよく二十三日の祭日なので、学校も研究も休みであったため、真鍋さんはすぐきてくれた。そしてひととおり胃部の診察をしたのち、おもいのほかに重態なのを知った。そしてこういう場合には薬を吐くおそれがあるため、いままで先生がもちいなれた処方にのっとるのを可と思惟したが、それを菅さんへききにやるまでの処方として、適当な薬を盛って家へかえられた。先生はそれをのんだ。すると昼の十二時半ごろであったろう。危惧

していたとおり先生はその薬をことごとく吐いてしまった。奥さんは真鍋さんへ電話をかけたが、おりあしく真鍋さんはいなかった。

ところが容態はそれにとどまらなかった。その午後の四時ごろになると、先生はもう一度の嘔吐をもよおされた。吐いたのは黒い胃液で、そのなかには、わずかながら薄赤い血が、脈をひいたように混じていたのである。

奥さんはその黒い胃液をみて、おどろいてまた吐血だと思った。そしてあわてて真鍋さんのもとに電話をかけたり、すぐお宅の前の中山医師のもとへ走って、医師が

在宅であるなら、どんな急変があるかわからぬから、ほかへ往診しないでいてくださるようにたのもうと思って、みずからそこへおもむいたり、ひとりで気をもんでいた。

そのさわぎの最中に、鵠沼から木曜日を目的にして、わざわざ先生にあいにきた阿部さんと和辻さんが玄関へおとずれた。今朝から絶対に訪客をさけていたのであったが、おりからの急に人手がたりなくていたので、奥さんはさっそく二人を招じあげた。病室にとおった和辻さんと阿部さんが、たまたまその壁につるされた羽根箒の

影を、鼻のまがった天狗面のような不祥の影絵（シルエット）としてみたのはそのときである。

そうこうしているうちに、真鍋さんが阿部さんという医師をつれて来診された。学校その他の公務でいそがしい真鍋さんが、万一留守であった時のかわりとして、住所もちかい阿部さんを、相談相手につれてきたのである。二人の医師がみた結果は、かなりわるい容態であった。

薬は嘔吐をおそれて匙ですこしずつのませることになった。

看護婦が二人つききりで、容態をみることになった。

そして翌日から先生は三日間絶食せられることになった。それはいつもの胃の療法であった。けれども先生はいつもよりずっと衰弱のきみがあった。そしていつものように安静でなく、始終苦悶のていで、夜もすっかり熟睡することなく、床上におきあがってみたり、うつぶせになってみたり、座禅を組んでみたりなぞして、なぜかおちついておられなかった。またしきりに身体のだるいのを訴えられた。――こうして三四日を経過した。

二十八日は先生はわりあいに元気がよかった。そして数日来の絶食の結果、しきりに食欲を訴えられた。前日

ごろから先生は朝の六時から夜の九時までに六回、三時間おきに牛乳や果物の汁やアイスクリームなぞの食物を、薬と交互にとるようにさだめられていた。ところが先生はその三時間がまちきれなかった。そしてそれがだんだん短縮して、二時間半となり、はなはだしきは二時間たつかたたぬにつぎの食物を請求された。こういう食物にかけては先生はまるで赤ン坊のようなものであった。この日もその赤ン坊のようなだだでしきりに奥さんを困らせていたのである。

こういうふうで九時におわるべき、最後のアイスクリ

ームを、先生はほとんど七八時ごろたべてしまった。そしてそのうえにまたなにか食うものを要求した。奥さんはもちろん拒絶した。すると先生はそんなら「薬をのむ、薬ならさしつかえはあるまい」といいだした。あまり病人のわがままに中ッ腹になった奥さんは、「じゃかってになさい。わるくなったってしりませんよ」といいすて、なすがままにまかしていた。

それがかれこれ十時近くででもあったろう。先生は寝につき、奥さんは枕もとの机にもたれて、「ホトトギス」かなにかを読んでいた。するとそれから一時間ほどたっ

たとき、やすらかな寝についていたと思われていた先生は急に「おい」といっておきあがった。そしてびッくりしてみあげている奥さんに、「頭がへんだから水をかけてくれ」といわれた。あまりのふいに奥さんはなおも意をとりかねて瞠目（どうもく）している一瞬間、先生はさらに突然「あッ」といったまま床上に昏倒した。いそいで奥さんがかけよって、脈をみると手には脈搏がたえていた。

看護婦は容態にかわりがないため、早く寝につかせて、おきていたのは奥さん一人であった。奥さんはおどろいて手をたたいて皆をよんだがだれもおきてこない。とな

りの室にねていた令嬢をよびたてたけれど、それもおきてくる様子がなかった。そこでやむをえず奥さんは、人事不省の先生をそこへおいて、いそいで書斎から廊下へとびだした。

看護婦や下女たちがやっとおきてきた。それで奥さんはすぐ書斎へとってかえして、そこにあったやかんの口から水をふくみ、先生の額をめがけて霧をふいたり、しめしたりした。するとようやく先生は息をふきかえして、目をひらき、「どうも頭がへんだから、もっと水をかけてくれ」というので、奥さんはやかんにあるだけの水を、

寝床の上をもかまわずざアざアと先生の額にそそいだ。すると先生は身ぶるいをされて、「ああいい気持だ。ほんとにいい気持だ」とよみがえったようにおっしゃった。

奥さんはひと安心した。けれどもふたたびこんなことがあってはたいへんだと思って、さっそくお医者さんのところへ電話をかけたり、自身でお宅の前の中山医師の家へ、カンフル注射をしてもらうつもりでいった。中山さんはいなかった。けれども奥さんは代診の人にたのんで、注射の用具をとりそろえてつれてきた。けれども先生の様子にそう危険もないので、そのまま模様をみてい

たが、そのうちに中山さんがきて、カンフルなら何度やっても別に影響をのこすわけのものでないから、安心のためやったらよかろうというので、朝、真鍋さんたちのくるまでの用心に、注射をした。

朝になると真鍋さんが阿部さんをつれて来診した。その後の灌腸によるまッくろな血便をみて、先生にこの日大出血があったことがわかった。ゆゆしい重態なので、お二人で相談の結果、その道に老練な先生で自由に相談のできる専門家を召聘することになった。胃腸病院の南さんがその選にのぼった。この日からして四人のお医者

がかわるがわる先生の家で宿直をすることになった。

こういう危険な状態で、またまた先生に絶食の二三日はすぎた。するとやがてまた食欲が先生の腹のなかに燃えたつときがきた。こえて十二月二日の日は、先生のかげんもよく、元気もよかった。そしてなにか食物を要求さるるにいたった。お医者さんたちはようやく、うすい葛湯をゆるした。その淡い、申しわけばかりの葛湯を、ためしにお医師さんたちがまずのみ、ついですすめられるままに奥さんものんでみた。すこしも味らしい味がなかった。そしてそののこりの葛湯は、ようやくにして先

生の枕もとにはこばれた。それでも先生はおいしそうにのんだりした。

ところがその午後であった。三時ごろであったか、先生は便通をもよおして床上におきあがった。そして看護婦のあてがった便器にむかわれた。当番は真鍋さんであった。氏は先生の脈搏をとりながら様子をみると、先生は便をうながすために、平常の場合のようにりきもうとしていた。それで大いにびッくりして、それをやめるように注意をあたえようとした一瞬時、先生はもう「うん」とりきんでしまった。するとそのとたんに、真鍋さんの

おさえていた手の脈搏がぴりぴりとみだれてあがった。そして先生の顔はみるみるうちに蒼くなって、やがて人事不省におちいってしまった。――これが第二回の大いなる内出血であった。

急報に応じて四人の医師があつまった。南さん、阿部さん、加藤さん（真鍋さんの助手）、それにまたさらに相談相手として聘（こ）いむかえた宮本さん。これに真鍋さんをくわえた医師たちは、それから夜を徹して診療につとめた。カンフル注射のあいだには、出血をとめるためのゲラチンが注射せられた。

二日の夜は絶望のうちにすぎた。医師の面上にも、あらそわれぬ悲愁の色がみえる。奥さんはその絶望の顔と、「だめだ！」というような感投詞とともに、ささやきあってる声をきくのが、なによりもつらかった。それで居間へかえって、床の中にねていた。けれども寝ようにも寝つかれなかった。おなじ心の野上さんも、毛布をかぶって茶の間に寝ていた。すると四人のお医者さんが、一時間おきにかわるがわる病室へいっては、診察をして、結果の報告をもたらしてくる。そしてそれをドイツ語で語りあうている。野上さんは寝たふりをして、きくとも

なしにそれをきいていた。望みのある言葉は一つもない。野上さんもまったく悲観してしまった。門人のおもだった人は、三十日ごろからして、かわるがわる万一にそなえる当直をしていたのであるが、この呪うべき日はじつに野上さんが当番にあたっていたのである。

すると暁近くになって、ようやく医師たちの面上に喜色がみえだした。「だいぶいいようだな」「このぶんなら大丈夫かもしれない」こう言葉がきれぎれにきかれた。そして奥さんがおきていったときには、真鍋さんがはれぼったい目によろこびをたたえて、「奥さん、御安心な

さい。たいへん具合がようございます」といった。

小康はあった。しかしそれはじつに小なる小康にすぎなかった。衰弱しきった先生の体は、前後二度の内出血をへていまやわずかに生死の剣が峰をふみこたえているにすぎないのである。もう滋養灌腸も効がなかった。食道をうるおすにもたりぬわずか一匙の赤酒が、先生の摂取する唯一の飲物であった。――かくて先生は、しだいしだいにおとろえてゆくばかりだった。ただ先生の意識はあくまで明瞭で、医師のほどこす注射の態を、なにかのためにふかく観察しておくかのごとくみずからしけじ

けとみつめていたりした。その注射をする先生の大腿部は、みるかげもなく骨立って、すでに十数回の注射の針が、むざんな膏薬のあとをとどめているのであった。

七八日の朝であった。先生が急によびにによこしたので、奥さんはいそいで病室へいってみた。そして、「なにか御用でございますか」ときくと、先生はじっと奥さんの顔をみながら、

「いや、なんでもないんだ。おはよう！」といって、ほおえまれたりした。また、たまには、「今日の宿直はだれだい」ときいて、「野上さんです」というと、ちょっ

とあってみたい」といわれたこともあった。最後の病床にある先生がなんとはなしに寂寥を感じておられたのが、これによって涙ぐましくおもいかえされる。……

こうして衰弱に衰弱をかさねた先生は、いよいよ最後の九日に達した。――

八日の夜の門人の当直は内田君であった。奥さんは連日の看護づかれと、病人をみればおこる悲痛の感にたえかねて、しいて早く床についていた。内田君は百四つもうつ自分の脈搏をかぞえながら、ひとり寒燈を守っておきていた。すると朝の二時ごろになって、医師からいよ

いよ最後の宣告がくだった。もう絶望だから、知らすべき親戚故旧にはそれぞれ通知を発せよというのである。内田君は電報用紙に危篤の報知を何枚もしるして、また一人粛然として夜があけるのをまっていた。

十二月九日の夜は灰色にあけはなたれた。心痛を慮ったものか、まだ医師から知らされていない奥さんは、朝病室へ入ってみると、先生の顔は昨日とまるでちがっていた。昨日までのそれはおとろえたなりに生気があった。けれども今日のそれは……ああ奥さんはそれをみて、いかばかり悲しく覚悟をさだめねばならなかったであろ

う。それで室外へでて真鍋さんに、
「先生、病人はもうだめでございますね」といい誘うと、真鍋さんも言下に、
「ええ、もうだめです」と答えた。
覚悟をさだめだ奥さんは、そこではじめて先生の旧友たる、中村是公氏等に急報を発して、まつべからざる臨終に、そなえねばならなかった。このさい急に知らすべき先生の御親戚といっても、ただ矢来の御令兄だけで、その人はすでに先生の安否を気づかうて、朝からお宅へきていた。

令息や令嬢は、医師が「ひるまではもつでしょう」というので、それぞれの学校へでかけていった。士官学校に教鞭をとっている内田君は、おなじく学校へゆこうかどうしようかと思って、医師に、「先生は二時ぐらいまでは大丈夫でしょうな」とたずねたら、「われわれは最後まで回復の信念をもって、全力をつくすだけのことで、そういう予言はできない」と叱られたので、そのままおもいとどまることに決心した。

絶望のうちに時はすぎてゆく。十一時ちかくのことであった。いよいよ医師から臨終がちかいから一同最後の

死床にあつまって、永訣をせよとの宣告がくだった。先生は今朝から食塩注射の反応もなく、脈搏はますますあがるばかり、体温はますますさがるばかりの状態であった。臨終ちかしときいて奥さんはすべてをすてて枕辺へよった。

令息、令嬢には、それぞれの学校へ、急使を走らせて迎えにやった。いちばんはじめに恒子さん（次女）と愛子（四女）さんとが帰ってきた。そして先生の枕辺にすわるやいなや、しくしくと泣きはじめた。奥さんは涙が先生の心を激動させるのを慮って、それを静かにとめた。

するといままでだまって病床によこたわっていた先生が、

「泣いてもいいよ」とおちついた声でおっしゃった。そしてその泣いてる娘が、だれであるかをききたがった。奥さんはだまっていた。

そのうちに暁星へかよっている純一さんと伸六さんがかえってきた。可愛いい金モールの記章を縫った制服の二人は、病室にかけこむやいなや、先生の枕もとにどかと膝をそろえてすわった。するとその動揺が臥ている先生の頭にひびいたのであろう。みうごきもしなかった先

生は、ただ目をあげてこの二愛児の顔を静かにみあげた。そしてなんともいえぬ微笑を、――奥さんの言葉にしたがえば「にやーっ」とうかべた。

前後して筆子さん（長女）や栄子さん（三女）や千鶴子さん（令姪）も帰ってきた。筆子さんの俥は、いそいだため途中でこわれて、も一度のりかえねばならなかった。

集っていた友人門弟らも、永訣のためつづいて枕辺へはいってきた。――いまはただ先生のやすらかな最後をまつばかりであった。すでに昏睡に入った先生の息は、

細くたえだえにつづいていた。……

ところがその時おくれてその場へきた宮本さんの発言で、たとえ絶望にもせよ、姑息にもせよ、も一度最後の食塩注射をして、それでだめだったら真にあきらめようということが提言された。すでに死を覚悟しても、奥さんや医師たちの心に、未練という軟弱な字では形容のできぬ、ある一縷の望みがあった。「ひょっとしたらまだ！」こう思った人々は、ここに最後の、しかもデスペレートな一針から、も一度先生の体内に食塩を送ることになった。枕辺につどうた人は一縷の望みをいだいてま

た去った。そしてのこった医師と看護婦の手によって注射ははじまった。するといままでほとんど昏睡の状態におちいっていた先生が、突然頭をうごかしだした。反応があったのである！　先生は目をひらいて、なにか食ってみたいと訴えられた。一匙の赤酒があたえられた。先生は「うまい」とおっしゃってそれに舌をうるおされた。――かくてまた一時ながらも、おのおのの心に望みの念はわきたった。

そうこうするうちに、急をきいた中村是公氏がかけつけた。注射後の小康で先生はまどろんでいられたが、奥

さんが招じいれるままに病室へついていった氏は、病床の枕もとにだまって立ってそっとやつれはてた旧友の顔をのぞきこんだ時、たえかねてそこへすわったままはふりおつる涙をやっと手でおさえた。奥さんもそれをみると、いままでこらえにこらえていた涙が、とめどもなく流れでるのを感じた。しばらく室のなかに、この半生の親交をつづけてきた老友と、半生をともにしてきた夫人との、おさえかねる静かなすすりなきの音がみちていた。

やがて奥さんはそっと先生のそばによって、「あなた、あなた」とよびおこした。先生は静かに目をひらいた。

「あなた、中村さんがいらっしゃいました」奥さんはつづいていった。
「中村？　中村だれだ？」
「中村是公さんです」
「ああそうか。よしよし」
こういった先生は、また静かに満足して目をとじた。老友の訣別はあくまで静かにおわった。中村さんは赤くなった目をおさえて出ていった。
絶望のうちに、一縷の望みをもった時間は、すべてにかかわらずすぎてゆく。その時間の経過はそも、先生を

死にいそがすのであろうか。生にむかって運びゆくのであろうか。

私が先生のお宅へゆきついたのは、ちょうどこの生死をさだめがたい九日の午後三時前後であった。――話はまたもとへかえる。

そのとき、茶の間にあつまっていた人々のあいだには、その一縷の希望を土台にして、あくまで先生の生を信じようとする信念が、燃えたっていた。それで奥さんがはいってきて、「朝日」の写真班に嘱して、病床にある先生を撮影しようという相談を皆にしたとき、皆はなんと

なく不吉なショックをうけた。一方うつしておきたいという念とともに、もしもそんなことをして、病床の先生に知れたなら、あの敏感な先生をかえって死にいそがせはしまいかという危惧で、おのおのは是非をいいあらそった。

「大丈夫ですよ奥さん。いまとらなくたって、先生がこれでお亡くなりになるようなことはありません」だれかがいった。

「でも紀念のために、わたしとっておきたいと思うのよ」奥さんの顔には、とりつけたような微笑があった。

それについてはだれも異存はなかった。光線をためすと、まだマグネシアをたかずにすむことがわかった。それならば病人に知らすことなく撮影ができる。――こう一決して、病室の隣りのふすまは静かにはずされた。そしてそっと病床の足もとのほうから、レンズはおとろえた先生の顔にむけられた。夕暮にちかいほのびかりが斜にさしている枕頭の、愛用の時計、白布をかけた薬罎、二つに折った座布団の枕、やおらかにおおうた白い毛布、それから遠くかすんだ書斎のじゅうたん、それらを背景にした先生の病顔が、ほとんど銀にちかい髯をひからし

て、おごそかに種板のなかにおさまった……。

夕暮近くなるとともに、何事もなく時間のたつとともに、われわれの希望はますます色をこくしていった。先生の回復を強調してやまない赤木君は、なおもその信念を語りついでいた。森田さんがそばでおなじくそれに加わっていた。われわれはおのおのの心の代弁者をえたように、それに耳をかたむけてかつ信じかつなぐさめていた。

そこへ診察をおえた医師たちがはいってきた。いかにも冷静な自然科学者らしい南さんの顔が、私の目をひい

た。真鍋さんの顔は心痛で、ありありと感情がうかんでみえた。

「どうです。希望(ホフヌンク)をもってもいいんでしょう」と赤木君が真鍋さんにはじめから吉報を要求するような口調で問うた。

「いや、もう偶然(ツーファール)をまつばかりです」真鍋さんのしずんだ声が答えた。

しかしわれわれはまったくその偶然を信じて疑わなかったのである！　そしてその偶然の奇跡を信じたまま、「朝日」の人たちがきたり、急をきいた知友がきて、茶

の間が混雑してくるままに、僕らだけ門のそばの小さな離屋のほうへいった。森田さん、阿部（次郎）さん、津田さん、内田君、赤木君、岡田君なぞの同勢であった。茶の間のほうには狩野さん、大塚さん、菅さん、斎藤さん、畔柳さん、森さん、速水さん、松浦さん、なぞの知友門人諸氏および松根さん、野上さん、小宮さん、なぞの頭株だけがのこった。

離室へいってみると、そこの小さな六畳に、長男の純一君がこたつに足をいれ、身を一閑ばりの机によりかけて、一生懸命勲章の画を描いていた。みなはそれをいい

ことにしてこたつの周囲にあつまり、「たいへんはいってきやがったなあ」といったまま、金鵄勲章の輪郭をなぞっている純一君にからかいだした。

「純一ちゃん。さっきお父さんはなんとおっしゃったい」だれかがきいた。

「おやじはきたない顔をしてねていたよ。どこのじいくたがねているのかと思った」

この十一になる露悪家はこの危急な際をしらずに、平気で峻棘に自分の父の寝顔を批評した。この無邪気なる悪口家は、かつて常にとおりすがりの父をみて、「あば

たづら」とよんだのである。こののびのびと育った、愛すべき都会の自然児は、この清透な目をあげて、この一生の大異変をなんとみていたか。彼はただおとろえておもがわりのした父の顔だけをみた。そしてその顔の背後に、おそろしい影をつくっている死を、まるで知らずにいる。

私はゆくりなくもこの言葉によって、さっき岡田君とともにそっと病室へはいって、みてきた先生の顔をまざまざとおもいだした。永訣の際いなかった私と岡田君とは、四時ごろおくれて先生のお顔を拝しにいったのだっ

た。

はじめわれわれは病室の窓のそとから、そっと先生のお顔をかいまみるだけにとどめようと思った。そしてひそかに窓帷のきわからくらい病室のなかをのぞきこんでいた。するとなかにいたお医者さんが、手まねでまねぎいれてくれた。それで、われわれはそっと音のせぬようガーゼをまきつけてあるドアをあけてなかへはいった。先生はなにも知らずにねておられた。しばらく遠い枕上のほうからおずおずのぞきこんでいると、今度は体をさすっていた看護婦が、小声で、「こちらへいらっしゃい」

といってくれた。われわれは先生の顔に面した、寝床の左側に端座して、あらためて先生の顔をじっとながめた。黒布をおおうた電燈の光りが、陰鬱におちている部屋のなかで、白くほのめく毛布のはしから、まだ赤みのある、てらてらした先生の顔が、静かに息をついていた。両頬にはかつてみたことのない疎鬚が、もじゃもじゃとはえている。しかも銀色にひかるその髯のために、先生の顔はいいようのない聖さと、厳さと尊さとをましていた。われわれはそれをみてじっと頭をたれた。そして退出してきた。その尊い顔をとらえて、いまもしここにこの愛

すべき赤裸々の少年は、一言「きたない顔」といった。私は自分のうけた感じを是認するとともに、またこの愛児のうけた感じをも是認せざるをえない。私はそこになんともいえぬ意味を読んだ。そしてあらためてこの愛すべき少年の相手となるべくそこの黒板の前にたった。純一君はその黒板の上に、私とカブトの絵のかきくらべをしようと要求したのである。

私と純一君とは白墨をとってカブトをかきはじめた。純一君はそっと私のほうをうかがいながら、自分の画のたりないところを訂正した。ちょうどそのカブトのクワ

型の、小さな環状の凹処をおぎなっていた時である。命をうけた女中が、さる知己のかたへ先生の臨終がちかい旨の電話をかけにきた。電話器はわれわれの画を描いている、すぐうしろにあった。

「もしもし、あの旦那様が、どうしてもだめでございますから、すぐおいでくださいまし……」

こういう意味の女中の言葉が、なんの容赦もなく、カブトのクワ型をなぞっている、純一君の耳にはいった。純一君はふいに白墨の手をとどめて、僕のほうをみかえった。

「お父さんほんとうに死ぬの」

こういってみあげた目には、先刻の「批評」の「犀利」はなかった。そしてそれは真実の危憂と悲哀とにみちていた。私は心からこの少年を、だきしめてやりたいように感じた。

「いいえ、大丈夫ですよ。大丈夫ですよ」

私は狼狽してこういった。そしてそれになぐさめられたともなく純一君は、ふたたびカブトのうちひもにとりかかった。

この間のことであった。先刻から先生の生に対して、

あくまで自信をましてきた森田さんは、家がちかいのをたのみにして、夜来の睡眠不足の体をやすめんがため、もし万一のことがあったら、さっそくもよりの酒屋へ電話をかけてくれと私にたのんで、かなり安心してかえっていった。それをみるとつかれていた赤木君も、ひとまず下宿へかえってやすみたくなったのであろう。これまた僕に万一のさいの電話をたのんで、二人ともかえってしまった。もう先生が回復するものと、すでに信念をきずきあげてしまった一座は、万一を慮ってそれをとめるものさえなかった。

二人がかえるといれちがいに、鵠沼の安倍さんと和辻さんとが到着した。

私と純一君のカブトはたいていできあがった。するとそのときである。母屋のほうからあわただしい下駄の音がして、女中がいそいでとびこんできた。

「純一さま、はやくおいであそばせ。お父さまがたいへんでございます」

女中はさけぶようにこういって、純一君をつかまえた。そこのこたつにいた連中は、それというので、みな一度にたちあがった。そしてあわてて母屋のほうにかけつけ

た。

私は一人のこって、わくわくしながら電話の把手をとった。交換手はなかなかでてこなかった。私は叱りつけたりたのんだりするような声で、やっと森田さんのところへ急報した。それからさらに赤木君へ。――赤木君はまだ下宿へさえかえりついていなかった。こうしてようやく私はいそいで離屋をでようとすると、そこには私の下駄がなくて、どうまちがったものか、かえって純一君の小さな駒下駄が、謎のようにぽつりとおきのこされてあった。私は考うる暇もなく、その小さい下駄をつまさ

きにひッかけて、母屋のほうへ走っていった。

私が病室になっている書斎にはいったとき、まず目をうったものは、病床の周囲にだまって立っている黒い人々の群であった。そしてその人々が目をそそいでいる中心に、先生の死床が白くよこたわっていた。電燈のおおいはとりのぞかれて、光りはあざやかにベッドをてらしていた。よこたわっている先生の左側には、先生の胸のあたりに手をおいて、奥さんが端座していた。そして先生の枕もとには、令嬢と令息、令兄その他の親戚のかたがたがすわっていた。すすりなきの声がそのあたりか

らもれた。私がはいってゆくと、さっきまであのカブトの絵をいっしょに描いていた純一君が、ふと涙にみちた目でみかえった。

奥さんは死者の顔をみずに、ずっと正面をみるともなくみつめていた。そして死んでゆく先生の唇をぬらすために、いちいち枕辺へよってくる人々に、末期の水筆をわたしていた。その顔とその姿はあきらかに「泣く」以上の悲痛を表白しているのであった。

私が人々のうしろから、いま息をひきとるばかりの先生をのぞきこんだ時、ちょうど岡田君が筆で先生の唇を

しめしていた。性急な私は、岡田君がそうしているのをみて、もうたいていの人がすんだのだなと思った。そして一つにはその際の無分別と無遠慮から、前にいた人をしずかにおしのけるようにして、そっとすすみでた。そして奥さんの手から水筆を受取って、さて先生のお顔をじっとみた。

そのお顔は先刻みた顔とはまったく異っていた。顔色はすっかり青く光沢を帯びて、目は大きくみひらかれていた。そしてその瞳は、凝視するともなく茫然と前方をみすえていた。それはあたかも、眼前にいる私の存在を

とおりこして、はるか永遠なるなにものかをみつめているようであった。

私は筆で血の気のない先生の唇をなでた。先生はその口をとおして、ひきつるような息づかいをしておられた。私はその筆を奥さんに渡そうとした。しかしじっと正面をみやっていた奥さんは、私の筆を受取ろうともしなかった。私は静かなる狼狽を感じた。そしてあらためて注意をうながすように、奥さんに筆を手渡しした。

私のあとから、大塚さんや菅さんなどその多くの人々が、先生に最後の水を供した。私はこの大いなる悲しみのな

かにも、自分の無作法を悔いた。

電話をかけた森田さんが、おくれてやっと到着した。そして人々の最後に、最後の水筆をとって、先生にささげた。

いまはただみなだまって、先生の死をみつめているばかりであった。黒くおしだまった人垣のなかに、先生はときどき頤をひくようにして、くるしい呼吸をゆるく刻んでいた。ときどき忘れたように呼吸がとまる。そして思いだしたように、「ぎくり」と喉をうごかされる。その喉のなかで、かすかに二三度啖のなる音がした。そし

て呼吸はだんだん静かになっていった。周囲の人はただ手をこまねて、だんだんかすかにまだかずすくなになってゆく呼吸を、じっとみつめねばならなかった。枕辺にちかいお嬢さんたちのあいだからは、幾度かすすりなきの声がもれた。

一分、二分、時はすぎてゆく。先生の息はますますかすかになった。すると病床の右側にすわっていた、真鍋さんが、手で奥さんに合図をした。奥さんは先生の額の上におおうてあった白布を目のところまでさげて、静かに先生の目をとざすべく、幾度かそっとなでおろした。

それがすむと真鍋さんはも一度指図をした。今度は奥さんが、先生の口をおもむろにとじはじめた。いつのまにか呼吸は、天地の寂寞の中にひそみいったように、しずけく消えさっていた。

真鍋さんは聴診器をとりだし、そして胸にかけた先生の毛布をとりのけて、心臓の上にそっとその白い象牙のさきをのせた。そしてじっとそこから指をはなして、そのなかの音にききいった。それからさらにも一度すこし上のほうにその聴診器を移した。そのあとからはかたわらの阿部さんが、おなじく静かに聴診器を心臓の上にあ

てた。二人はしばらくききいっていた。皆はかたずをのんでみていた。やがて聴診器を前のようにそっとはなした真鍋さんは、

「お気の毒でございます」と奥さんの前に頭をさげた。

それをきくと皆も、同時に首をたれて、なにものともしれぬ森厳なものに礼拝した。

万事は休した。先生の顔のうえには、白布がおおわれて、もうみるよしもなかった。みたところでなんになろう。先生にはもう息がないのだ。あの理知と温情にみちた目は、もう永久にとじられたのだ。先生は死んだのだ。

いま自分の目の前で死んだのだ。――私にはそれが信ぜられないような気がした。

「さあ皆さん。どうかお立ちください」奥さんがこうおっしゃった。皆は静かに出ていった。私は茫然としてたちつくしていた。そして小宮さんに目でうながされて、はじめてみかえりながら病室を出ていった。むこうの隅では津田さんが、泣きくずれてたとうともしなかった。奥さんが困って、それをひきたてていた。私は涙が出なかった。いな、出たのかもしれない。しかし自分には感ぜられなかった。――

赤木君と松岡とは、とうとう臨終のまにあわなかった。前後しておくれてきた二人は、すでにあの名園有別天地の屏風をさかさまにたてた下で、息のない先生に対面した。私は赤木君のまにあわなかったのを、自分の電話のゆきとどかぬためであり、自分の過失ででもあるように気の毒に感じた。あとできくと赤木君のいそがせたタクシーは、途中でパンクしたのだそうである。

先生の遺骸は、――もう先生も遺骸となってしまった――奥さんと真鍋さんと小宮さんたちの合議の結果、すぐ大学病院で解剖にふすることとときまった。それからま

た先生の死面（デッドマスク）は、森田さんたちの意見で、すぐとられることになった。その作製者には、大塚さんの親友であるところから、新海竹太郎氏がえらばれた。死面はどうしてとるものだろうか。そんなことが悲しみにしずんでばかりもいられない群のあいだで、一つの問題になった。鷗外先生の「金比羅」によると、愛児の死面をとったらしく書いてあるから、電話をかけてきいたらどうだという人がある。だれもかれもベエトオフェンやブレークの、写真版でみた白い石膏の死面を知ってはいたが、画家の津田君さえどうするものか実際の方法は知らなかった。

急使をはしらした新海さんからは、さっそくあがりますという返事の電話があった。

この間の夏目邸は、悲痛と混乱とにとざされていた。逝去の発表は朝日が各新聞社へするはずであった。けれどもたえず他の新聞記者がおとずれてきた。記者は鈴木さんとか森田さんとかをひッぱりだして、意見を徴そうとした。この生涯の大事にさいして、鈴木さんたちがいちいち記者の引見ができないのもむりはなかった。けれども受付を命ぜられて玄関にいた僕らは、いちいちそれをことわって帰すのに苦労をした。私はつくづく記者と

いう職業に同情した。彼らは手をかえ品をかえて幾度も幾度もあいにきた。そしてあえないと、むッといなおるような様子を示したりした。とうとう森田さんが代表して、というよりはじつは代表するようなはめになって、離屋のほうで記者を引見するようになった。そのときのことは森田さんがのちに書いた、「太陽」の記事をみればわかる。

このあいだにわれわれは電報をうつ。見舞の手紙や電報をうけとる。なかなかいそがしくなってきた。岩波さん、松根さん、小宮さん、そういう事務のほうを司宰す

べき人々は、ことにひたすら悲しみをおさえて、たちはたらかねばならなかった。事務の担任がきめられた。われわれはとりあえず、受付の役にまわった。そのうちに新海さんが、型から石膏像を作製する人をつれてやってきた。かくて日本最初の死面は、この人の手によってつくられるのであった。われわれは立ってみていた。

先生の顔はまず、頭から頤をかけて、毛のあるところにぐるりと布をまかれた。そしてそのなかの顔には、油のようなワゼリンがぬられた。それがすこしく私にはいやな感じがした。それがすむと、今度は鉢のなかへ、食

塩と水をいれて、石膏がとかされた。そして新海さんの助手は、そのとろとろした白い半液体を、匙ですくって容赦なく先生の額の上にたらしはじめた。このときは私はなおさらにいやな気がした。こんなことをさせるんじゃなかったと思った。たらたら、たらたらとぬりあがってゆく白い石膏の汁は、ちょっとかわきそうにもなく思われた。そしてそれがいま死んだばかりの先生に、いくらかの不快な感をあたえ、また死顔の神聖をけがすような気さえした。けれどもすぐそんなことをいっている場合じゃないと思いかえした。白い石膏は、ヘラによって

容赦なく、髯だけをのこした先生の顔の上にもりあげられた。そしてその型をはずすときにおれてはならぬというので、針金がそのあいだに挿入された。石膏が約六七分あつみにおおいおわると、その製作者ははじめて手をやすめた。石膏がかわくのをまつのである。

かわくのはおもいのほかに早かった。約五分とまたぬうちに、製作者はそっと型を顔からはずしにかかった。肉の部分はすぐとれそうであった。けれども眉毛や疎髯にかかった部分は、毛が石膏にねばりついて、なかなか離れないらしかった。とこうするうちにようやく型は顔

をはなれた。もう新海さんの手でもった白い石膏のなかに、先生の顔の凹面が、はっきり刻みこまれていた。

それはすでに半夜ちかくであった。こうしてわりあいに簡単に、死面の作型がすむと、通夜の第一夜がきた。

木曜日にはいつもきなれた室の中央、やや奥よりの火鉢には、杉村楚人冠氏ら朝日の人々が三人ほど集まっていた。それからむこうの隅には、松浦さん速水さん阿部さん二宮さんなぞがすわっている。こちらの隅には、和辻さん内田君岡田君赤木君および僕らの若い連中がいた。僕らの仲間では話がいつのまにか先生の書画のこと

になっていった。たれは何幅、かれは何幅、おれは先生がまだまだ御存命だと思って、書いてもらおうと思いながら一枚も書いてもらわずにしまった、なぞと口々にいいだした。この場合逸することのできぬ収集家として、滝田さんのことも話題にのぼった。そして皆はひどくうらやましがった。赤木君は自分の最大の収穫として、「明暗」の原稿を誇った。こうして皆の心がひたすら先生の書画にむききってしまった時、岡田君がふと書斎の隅から、先生の書きそんじ（といっても、ほごというほどではない）をみつけて、ひきだしてきた。皆の心に専有欲

がわいた。そしておのおのそのなかからいいのを選びだして、もって帰ろうという大それた考えになった。そこここで争奪がはじまりそうになったり、先取権の主張がありそうなほど、事態はそうぞうしくなった。われわれはそれが先生の枕頭であること、通夜の第一夜であることをほとんどわすれかけて、その書画をくりひろげていた。そこへ小宮さんがなにげなくはいってきた。もとより渦中にいなかった小宮さんには、この場合こうした有様は、ふつう以上ににがにがしく感ぜられたにちがいない。はいってきたときから、われかれはこれはとんだこ

とをみつかったとおもった。果然、しまいおくれてぐずぐずとしていた私は、まず第一に「よしたまえ」とおだやかながら強く叱られてしまった。僕の心にはじめてわるいことをしたという感じがわいた。それでしまいこもうとした一幅を、おもいきってはきだした。するとそれと同時に、たれもかれも懐中からふかく秘めこんだ書画をだしはじめた。欲しいという心持は伝染して、意外な君子人まで、懐中に蔵しこんでいた。

皆は吐きだしながら、こともなげに苦笑したが、じつはなんともいえぬ悔恨の念におそわれていた。それでい

ままでの衝動的行為を、ひたすら悔恨によってジャスチファイせんがために、こうなるまでの心理を、解剖したり説明したり、弁解したり後悔したりした。そのことについても、赤木君がいちばん多くしゃべった。それでけっきょくは赤木君が、いちばんこの行為について、多くいわずにいられないだけそれだけ、不安（アンイージ）を感じているのだという結論さえできた。

しかしそんなことで通夜のながい二三時間は、またたくまにすぎた。そしてそのあとには、四時五時という払暁の、もっともねむい通夜の難関がきた。けれどもそれ

も、赤木君と和辻さんとのあいだに生じた、ある議論をきいているうちに時間がたった。議論はなんでも自然主義前派に連関した問題だった。

朝になりかけたころ、奥さんがでてこられた。皆は夜来の醜態を懺悔して、あらためて奥さんのお叱りをうけた。叱られると皆はなんだかあらためて償罪をしたように、心がやすまるのを感じた。

そうこうするうちに、先生の遺骸に侍した第一夜は、「硝子戸の外」からあけはなれてきた。

あくる十日の一日を、私は赤木君、岡田君、松岡とと

もに、玄関にいて弔問者の応接をした。いろいろな階級のいろいろな人がきた。私はその一人一人について、そう叙述をついやすべき印象をもたない。ただ最初にきたのが松岡映丘氏だったのを、あきらかに記憶している。それから午前中に私の知ったかぎりでは、馬場さんがきた。戸川さんがきた。田村俊子氏がきた。たしか午後に近松秋江氏がきた。長谷川時雨女史もきた。文壇の人があまりにこないのが不思議だった。そのほかにはお嬢さんのお友だちが、花をもってきたのを、単調をやぶるものとして記憶している。

この繁忙のあいだにも、われわれは先生の遺骸を、一時ごろ大学病院へ送った。樺色の幌をかけた、輿(こし)のような担架状の車台へ、先生の亡骸を運びいれた時、さらにその車台の四隅をかついで、玄関先まで運びだした時、私の手はほとんど軽重の感じがなかった。

夕方からつめたい濛雨がおちてきた。大学へ脳と胃とをのこしてきた遺骸は、夜に入って雨のなかをかえってきた。人々がぬれた幌をおしぬぐって、なかからほとんど行ったときとおなじ先生の遺骸を移した時、私はふたたび端正な死顔をみて、涙がこみあげてくるのを感じた。

長与博士の解剖をみおえて、遺骸とともに帰ってきた真鍋氏は、奥さんに、

「私もこれでやっと安心しました。これがほんとに先生の死期だったのです。たとえ今度なおっても、胃壁のある部分が、まるで薄くなっていたんですから、いつぽくりと穴があいて、急死するかわかりません。それに今度の解剖によって、われわれも微力ながら全力をそそいで、人事をつくしたがだめだったのがわかりました。まったくこうなるのが先生の天命だったのです。症状については私もおかげさまで、非常な参考になりました」と前提

をしながら、先生の剖撿の結果を、逐一報告した。その話は新聞にものり、雑誌にもでたから、ここには省略する。ただわれわれは胃部の潰瘍面の大きさにおどろくよりは、先生の脳にかんする、連想中枢の異常な発達を、あらためて興味ふかくきいたといっておこう。

この夜、逝去の報知文が刷りあがってきた。われわれは発信係の野上さんの依嘱で、封筒に宛名を書いて手伝った。ずいぶんたくさんの数があった。宛名を書く、原簿と照合する。容易なことではなかった。お嬢さんたちがそのできたぶんへ切手を面白がってはってくれた。そ

して今日からきた江口君や岡君に受付の任をたのんで、ひとまず疲れをやすめるため、夜中すぎて離室へねにいった。そこの六畳ではコタツの左右に純一ちゃんと伸六ちゃんとが、矢来の叔母さまのお伽噺をきいて、眠りにつこうとしていた。私と岡田君とはその次の間にいって、私は一枚の裏の赤いふとんにつつまって、隅のほうに臥した。

しばらくすると私の眠りは、ふいの侵入者によって中断された。令嬢たちの一小隊が、一連隊ほどの喚声をあげて、ねにきたのである。彼女らは自分よりもさきに、

神聖なるこの部屋の一部を狼籍にも占領した私どもをみて、内心腹をたてたにちがいない。いわんや彼女らの夜具が、いわれもなくむくつけき男の手に使用されているのをみては、不平の声をもらさざるをえなかったのである。令嬢たちはせわをしてくれる矢来の叔母さんに「あらいやだわ」とか、「寝いわ」とか、「風邪をひくわ」とか、口々に訴えている。そして一人が本文をいうと、あとから口をそろえて「ねえ」と感投する。このなかに「明暗」のなかの延子の前身がいる。継子や百合子の原型がいる。そう思って自分は眠りをさまされて腹もたっ

たが、我慢してひそかに注意していた。うちみたところ、いずれも可愛いお嬢さんたちである。これではこのうちのどの人でも、万一すがめになったとしたら、僕ならば永久に「うむ、そうか」なぞと平気でいられないと思った。そのうちに笑いかつ不平をいいながら、この人々はねついたらしい。

私もつかねてはいるしすぐ眠りにはいった。――こうして私は通夜の第二夜を、なかば寝てすごしてしまったのである。

あくる十一日、われわれはまた受付をして半日をすご

した。玄関へきた弔問客の名をきいて、帳面へ書きとめる。奥へとおすべき人は招じいれる。香奠をもらったら、障子ひとえをへだてて座敷のなかにいる会計係の、壮さんと孝ちゃんとに渡す。そういうことをかなり複雑にくりかえして、そのあいだには議論もすれば、批評もくわえる。けれども平常なら、おたがいの自我が衝突しあうところも、先生の死という大いなる事実の前に、すぐうちとけてしまう。みなはひたすら恰々(いい)として働いた。性来無性な僕すらが、すこしのほねおしみをもしなかった。そんなちいさな骨おしみなぞはまるで生れかわったよう

にしたくなかったのである。

正午ごろ芥川が鎌倉からきた。黒いフロックを着て、一擲したように髪を額上にみだしていた。彼は二三言おそくなった申訳をして、それから奥さんに挨拶し、先生の死顔に対面すると、もうわれわれとともに忙中の人であった。

午後になると芥川と私とは、明日の葬式の服装をととのえるため、ひとまず家へ帰った。二人はあたらしい感激で話しあった。電車をまっているあいだに、私はだれからかきいた真鍋さんの插話を彼に話した。それは大学

へ講義に出ている真鍋さんに、学生でだれ一人大山公の容態をたずねるものはないが、夏目先生のことは、氏が教室へはいるとどこでも第一に存否をたずねられる。そして氏が先生の重態に手をはなしかねて、休講の旨をつうじると、学生はこぞって夏目先生のためならば、どんなに講義がおくれてもかまわないという、真鍋さんもそのためまったく後顧の患なく手をつくしえたという感激にみちた話であった。私はそれをはなしてるうちに、胸がせまって涙があふれてきた。みると芥川も目にいっぱい涙をためていた。われわれはともに往来の人に顔をみ

られるのがはずかしいように感じた。電車のなかでも、われわれは先生のことについて語りあった。芥川はしきりに先生がないあとの、文壇の貧寒を論じていた。

夜六時ごろ、私はふたたび芥川と誘いあわして、南町へいった。そのとき葬儀に、門弟からも弔詞を捧げたものかどうかという小議論がおこっていた。いったい弔詞は、全廃する予定であった。が、しかしせっかく大阪の村山さん（朝日社長）から捧呈してきたものを、うけつけないというのも、あまり非礼であるというので、それと友人のと門下生のと、この三つをかざることにひとま

ず決定した。

ところが門下生のなかでも、そんな形式的な弔詞は、先生の意志に反するというので、反対するものが生じてきた。それに門弟のなかで、だれからも不平の生じないような、総代をえらむのはむずかしかった。そこで議論は百出した。みなは母屋の六畳の間にあつまって、あらためて相談会をひらいた。

松根東洋城さんははじめから敢然として反対した。理由は前にいったとおり、先生の意志に反するというのだった。この人と捧呈の熱心なる主張者赤木君とのあいだ

に、ちょッとした議論の火花が散った。森田さんはごめんどうとみて、いつのまにか座をはずした。鈴木さんはいつもの神経質な芸術家肌で、弔詞には反対した。阿部さんは火鉢のかたわらでおちついた謙譲を守っていた。議論は安倍さんがおだやかな口をひらいて、仲裁したのでやっとまとまった。弔詞の名目は、みずから「無志」だと称する鈴木さんの命名で、「門弟有志」ということになった。総代には小宮さんがおされた。小宮さんはこの際弔詞の文案をするだけの、心に余裕がないからと辞した。けれどもそれは、ただ心ばかりを記して、捧

呈するにとどめるということで、友人総代の狩野さんまで、渦中にひきいれた弔詞捧呈事件はやっと落着した。

それからみなはひと安心したような心持で、先生の遺骸の枕頭にあつまった。通夜の第三夜、最終夜はいつのまにかふけわたっていた。

室のむこうのすみに、今夜は矢来の先生の令兄をはじめ、令息や令嬢たちまで、ならんですわっていた。そのうちに奥さんも出てきた。そして席上の話は、森田さんの懺悔話をきッかけにして、ゆくりなくも先生生前のいろいろな逸話にはいっていった。奥さんや先輩たちの話

につれて、それぞれの場合の先生の姿が、あの時はああだった、この時はこうだったと、それともなくおもいだされた。座は笑いにみちながらしめやかになってゆく。追憶は追憶をよんで、つくるところをしらなかった。そして多くのその逸事が、ユーモラスであればあるだけ、先生の生前の風格が躍動し、またその諧謔にうらづけられた先生の心持に、粛然と襟をたださねばならないようなものが、多きを占めていた。奥さんも語りうむことを知らなかった。われわれもききあむことを知らなかった。

――こうして通夜の最後の夜は、はじめて通夜らしい気

分のうちに、しずかに曙をほのめかしてきた。そとには暁靄が、夢のようにこめわたっていた。

かくてついに先生を葬るべき、大正五年十二月十二日はあけはなれた。

（大正六年二月）

日本文学電子図書館

臨終記

著　者　久米正雄
制作者　宮澤一郎
底　本　「漱石全集　別 巻」角川書店
昭和42年10月10日５版発行

日本文学電子図書館